

柏原市所在遺跡発掘調査概報

—太平寺遺跡・安堂遺跡—

1988年度

1989年3月

柏原市教育委員会

は　し　が　き

柏原市は、生駒山地の南側にある緑豊かな環境をもち、都市の整備として、この自然の美を生かして住みよい町つくりをめざしている。

柏原市民憲章の中に、—1. 自然の美を生かし、住みよいまちをつくります。2. 文化遺産に学び、未来に生きる力をのばします。一の項目があり、戦後40数年が経ち経済的な生活が安定しつつある現在、近隣市町でもとりわけ多くの文化財がある市として、率先して文化財の愛護の浸透と文化財の保護施策を取組んでいきたいと考えている。その一環として、高井田横穴群の史跡の公有化と広く市民に活用して頂くために史跡公園計画を進めている。

本書に掲載した3件の調査は、太平寺・安堂遺跡の中で実施した原因負担による事業である。それぞれの調査を進めるにあたって色々の難問が存在したが、文化財の保護を前提とする市の姿勢にたいして申請者からの理解と協力のもとに実施したものである。決して十分な調査ではないけれどその結果は本書に記述したとおり貴重な成果が得られたと考える。

1989年3月

柏原市教育委員会

教育長 庵 刀 和 秀

例　　言

- 1、本書は、昭和63年度に柏原市教育委員会が原因者負担事業として実施した埋蔵文化財の発掘調査の中で、太平寺遺跡（88-2次調査）、安堂遺跡（88-1次調査、88-3次調査）における発掘調査概要報告書である。
- 2、発掘調査は、柏原市教育委員会社会教育課文化係北野　重を担当者として、昭和63年5月30日に着手し、同8月31日に終了した。
- 3、調査に要した諸費用は、それぞれの依頼者が負担した。
- 4、調査の実施にあたり、下記の諸氏の参加、協力があった。

松井隆彦	空山 茂	竹下 賢	奥川滋敏	安村俊史
谷口京子	寺川 欽	藪中優香	津田美智子	伊藤芳匡
稻岡利彦	岡田嗣生	田中國雄	本多憲治	前田耕司
松井美保子	尾野知永子	南ゆう子	寺尾正美	青木久美子
乾 優世	奥野 清	谷口鉄治	井上岩次郎	吉村啓次
浜木一二	鈴木 勝	田戸岩一	堀 一之	乃一敏恵
横関勢津子	吉居豊子	村口ゆき子		

- 5、本書の執筆は、北野が行った。
- 6、本書で使用した標高と方位は、特に注記のない限りT.P.磁北で示す。
- 7、本調査に際して、写真、実測図と共に当教育委員会で保管し、歴史資料館で展示を行っている。広く利用されることを願うものである。

目 次

第1章 調査に至る経過.....	1
第2章 太平寺遺跡.....	2
88-2次調査.....	2
第3章 安堂遺跡.....	11
88-1次調査.....	11
88-3次調査.....	12

挿 図 目 次

図-1 調査地位置図	図-9 調査区位置図
図-2 調査区位置図	図-10 遺構平面図
図-3 第1トレンチ平面図・断面図	図-11 井戸-1
図-4 第2・3トレンチ平面図・断面図	図-12 井戸-1出土遺物
図-5 出土遺物（土師器・須恵器）	図-13 井戸-1堀方出土遺物
図-6 出土遺物（瓦）	図-14 土坑-1出土遺物
図-7 出土遺物（瓦）	図-15 包含層出土遺物
図-8 調査地位置図	図-16 製塩土器

図 版 目 次

図版1 第3トレンチ上層、第3トレンチ上層	図版8 遺構全景、遺構全景
図版2 第3トレンチ上層、第3トレンチ断面	図版9 井戸-1、井戸-1
図版3 第3トレンチ上層、溝-1	図版10 建物-1、土坑-1
図版4 遺物出土状況、遺物出土状況	図版11 出土遺物、出土遺物
図版5 第1トレンチ、第1トレンチ	図版12 出土遺物、出土遺物
図版6 第2トレンチ、第2トレンチ	図版13 出土遺物、出土遺物
図版7 遺構検出状況、井戸-1	図版14 製塩土器、製塩土器

第1章 調査に至る経過

本年度の太平寺・安堂遺跡における発掘調査の内、原因者負担による事業は本書に掲載した通りである。当地域は、これまで調査例が少なかったが、近年共同住宅や集合住宅等が高層建物化しつつあり、遺跡の確認が行える深度まで掘削が行われるようになった。

ここ数年来の調査によって、太平寺・安堂遺跡は、智識寺や智識寺南行宮の存在や河内六大阪の一つである家原寺にかかる氏族の集落跡が遺存状態がよく遺っていることが確認されている。今回の申請は、これらの遺跡に何らかの影響が考えられるので、各申請者と協議を実施し行ったものである。

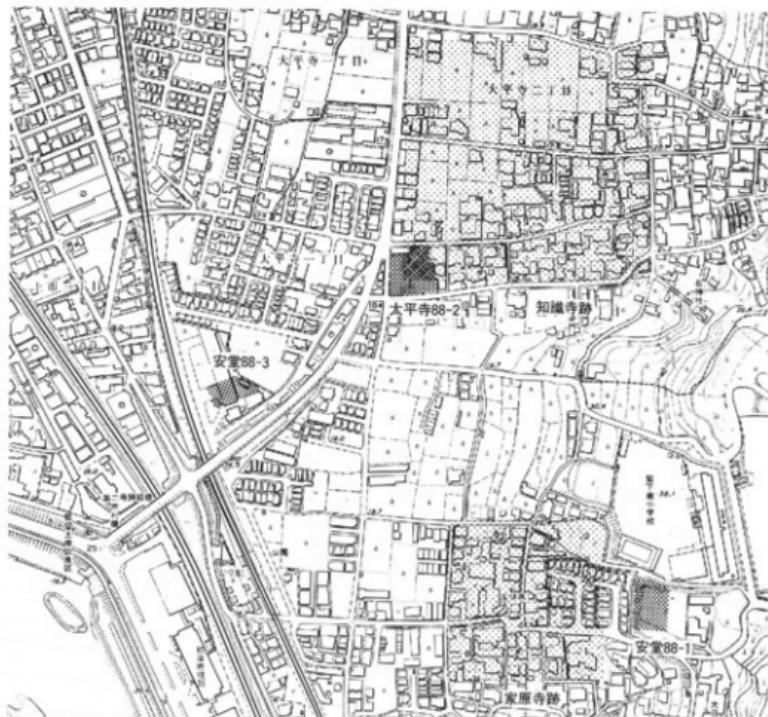


図-1 調査地位置図

第2章 太平寺遺跡

88-2次調査

- ・調査地区所在地 柏原市太平寺2丁目147-1
- ・調査担当者 北野 重
- ・調査期間 1988年5月30日～6月14日
- ・調査面積 170m² / 1,749.4m²

当調査区は、河内六大寺の一つ知識寺の寺域の南東部に位置する。智識寺は、薬師寺式の伽藍配置を持つ寺院と考えられている。この寺院は、天皇が行幸したとする多くの文献があり、同寺の據合那仏を拝顔して東大寺の大仏を造立したとの記事は有名である。

寺院の範囲及び規模等は、これまでに東塔の調査が行われているのみであり明確でない。瓦の出土等による推定範囲は、西側は東高野街道まで東側は石神社までを想定している。

申請書が提出されて後、寺院跡であるため重要な遺構があれば保存の協議を実施する故にたって5月18日に事前の試掘調査を実施した。その結果、約1.5メートルの深さで瓦、焼土、製鉄関連遺物等が出土した。これらの資料を基礎として申請者と協議をして、直接寺院に拘わる遺構が検出される可能性が少ないので建物の基礎によって破壊を受ける範囲に限定して調査を実施するようにした。

調査は、基礎の杭を打つ15×3メートルの範囲を2ヶ所、3×7メートルを1ヶ所設定して実施した。

第1トレンチは、一番南側に設定した東西方向のトレンチである。基本土層は、第1層、約65cmあり盛土である。第2層、50cmを測る黄灰色砂土である。大和川又は恩智川の氾濫によって堆積した砂層である。時期は、江戸時代以降と考えられる。第3層は、15cm、青灰色粘質土の旧耕作土である。第4層、約20cm位を測る。第3層とよく似ているが、砂土が多く含まれる。土師器と須恵器の細片が少量出土した。後世の混入が考えられるので時

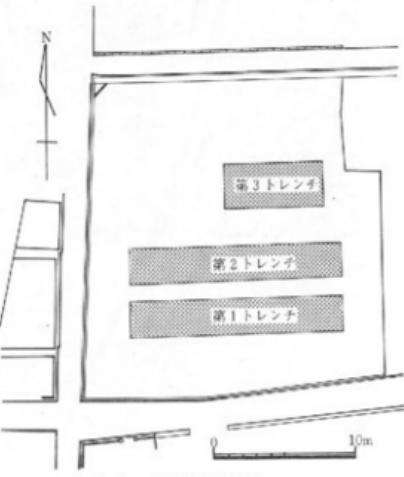


図-2 調査地位置図

期は明確でない。第5層は、約25cmあり灰青色砂質土である。土師器、須恵器、瓦が出土したがそれぞれ細片で実測が出来るものは少ない。第6層は、約30cmを測り青灰褐色粘質土である。この土層にも土器の細片が認められた。中世の時期と考えられる。第6層除去後に遺構面を検出した。溝1は、南北方向に真直ぐ伸びる溝で、横幅90cm、長さ2m以上、深さは、約5cm程である。底部は平底で埋土には砂土が見られた。遺構は、この溝1本である。

第7層は、灰黒色粘質土で厚さ約15cmを測る。土師器、須恵器が出土した。時期は、中世である。遺構は検出されなかった。第8層は、約10cmの青灰色粘質土である。遺物は含まれていなかった。この土層除去後に遺構面を検出した。溝2は、南北方向に真直ぐ伸びる溝である。溝埋土は、灰褐色砂上で土師器、須恵器、瓦等が少し含まれていた。時期は、奈良時代以降である。第9層は、5~10cm大の石を多く含む茶褐色粘質土で厚さ約25cmを測る。土層中土師器、須恵器、瓦、焼土等が多く出土した。時期は、飛鳥時代頃と考えられる。第10層は、灰褐色砂土である。厚さ約20cmを測る。遺物は含まれていなかった。第11層は、黄青灰色粘質土で地山である。遺構は、検出されなかった。地山は東側から西側へ緩い下向する傾斜である。

第2トレンチは、第1トレンチの直ぐ北側に設定した同規模のトレンチである。基本土層は、第1トレンチとほぼ同様である。第1層、上層に盛土があり下層に薄茶灰色砂質土である。下層は、ぶどう畑の耕作土である。第1トレンチでこの土層がなかったのは旧家屋の基礎等によって削平されたためであろう。第2層は、灰色砂土である。この土層を掘削途中で溝を検出した。断面観察により横幅50cm、深さ約30cmを測る。掘方断面は半円形で南北方向の溝である。埋土はすべて砂土である。第3層は、青灰色粘質土。第4層は、青灰色砂質土。第5層は、灰青色砂質土でシルト質の土層も多く含まれている。第6層は、青灰褐色粘質土である。第7層は、灰黒色粘質土である。第8層は、青灰色粘質土。小石を多く含む。第9層は、暗青灰色粘質土でシルト質をも含んでいる。第1トレ

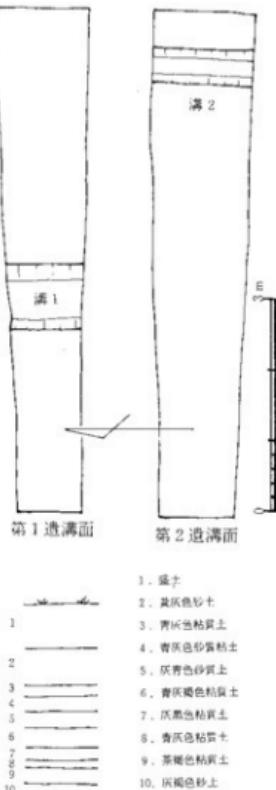


図-3 第1トレンチ
平面図・断面図

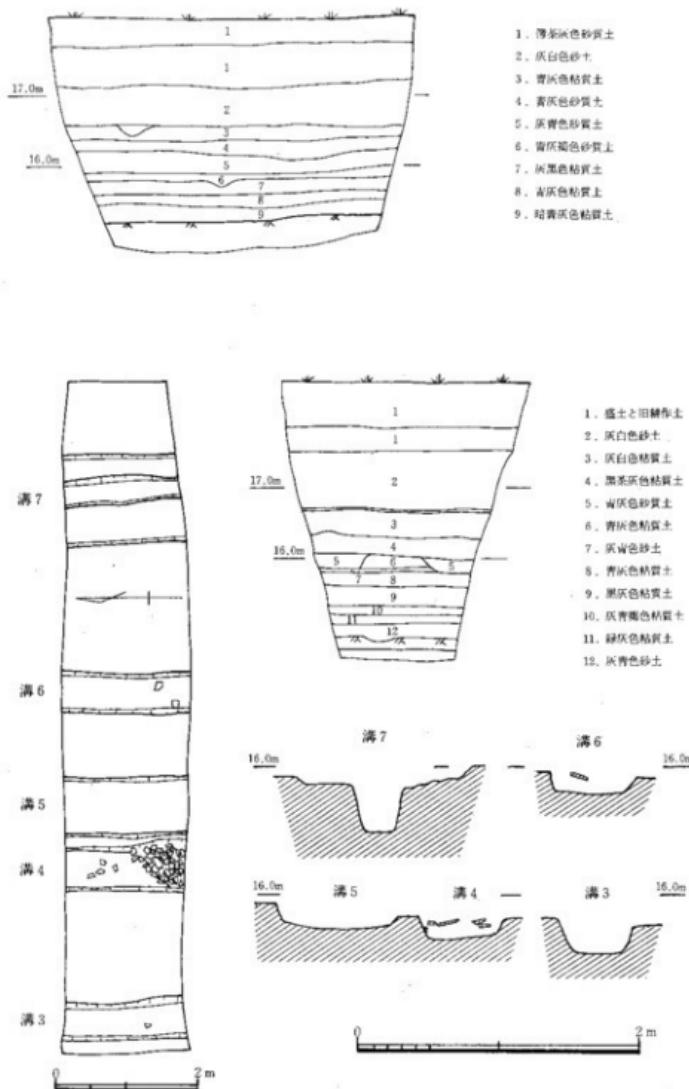


図-4 第2・3トレンチ平面図・断面図

ンチの溝2の続きを明確でなかった。第3トレンチではその続きを確認しているので恐らく削平してしまったかもしれない。遺構面の検出は注意深くおこなったが、當時湧水のため困難を伴った。

第3トレンチは、さらに北側に設定した東西方向7m、南北方向3mの規模のトレンチである。基本土層は、概ね第1、2トレンチと同様である。第1層は、上層が盛土、下層が薄茶灰色砂質土である。第2層は、灰白色砂土である。第3層は、灰白色粘質土。第4層は、黒茶灰色粘質土である。土師器、須恵器、瓦等が出土した。それぞれ細片で、時期は中世である。第5層は、青灰色砂質土である。第6層は、青灰色粘質土である。この土層は、東西方向に伸びる畦であろう。土器の細片を含み、時期は、中世である。第7層は、灰青色砂土である。第8層は、青灰色粘質土で土師器、須恵器、瓦等を多く含む。時期は、奈良時代であろう。この土層除去後に溝3～7を検出した。溝3は、一番西側に検出したもので、横幅約50cm、南北1.8m以上、深さ20cmを測る。埋土は、暗茶褐色粘質土で瓦を少し含む。溝4は、横幅70cm、深さ15cmで多くの瓦が埋没していた。底部は平底である。埋土は、暗茶褐色粘質土である。溝5は、横幅80cm、深さは15cmである。埋土は、灰色砂土である。遺物は含まれていなかった。溝6は、横幅約55cm、深さ15cmを測る。若干の瓦が出土した。溝7は、横幅1.25m、深さ40cmで掘方断面が2段掘削されている。埋土は灰色砂土である。溝肩より下がった面は凸凹になっている。瓦が少し出土した。これらの溝は、底部が平底で方向も南北を向き知識寺の軸方向と平行することが考えられる。第9層は、黒灰色粘質土で飛鳥時代の遺物が出土した。厚さは約30cmある。第10層は、灰青褐色粘質土、第11層は緑灰色粘質土。第12層は、灰青色砂土である。第13層は、黄褐色粘質土で地山であろう。第9層以下の土層は、弥生土器、古墳時代中期の土器を少し含んでいるが流れ込んだようなものである。

出土遺物（図-5～7）

出土遺物は、コンテナ15箱分出土した。弥生土器、土師器、須恵器、瓦、磁器、焼土等がある。

弥生土器

図化していないが、弥生時代の土器が少量出土した。この時代の集落は、直ぐ南側に遺跡の中心部があると考えられ、当地域はその縁辺部の荒廃地であるため遺物が流れ込んだもので細片である。

土師器（図-5）

土師器は、壺、高杯、杯、皿、鉢等が出土した。1は、古墳時代中期の小型丸底壺である。口縁部は、逆ハの字状に拡がり真直ぐ上方に伸びる。体部上方の肩部でよく張ってい

る。体部の下半部外面は横方向のヘラ削りを施し、内面は横方向のなで調整などであげ調整である。色調は、灰茶色で当地産である。2は、口径12.5cm、器高3.5cmを測る杯で内面に放射状の暗文が施されている。口縁端部内面は内傾して平坦である。3は、口径19.5cmを測る杯で口縁端部が小さく外反する。内外面ともよこなで調整である。4は、口径18.7cmを測る杯である。内面及び外面上半部をよこなで調整をして下半部をヘラ削りを行っている。器壁がやや厚く約7mmである。5は、小型の高杯の脚部である。外面は指押さえの成形である。6は、口径17.9cm、器高2.3cmを測る大皿で、内外面ナデ調整である。底部は、ヘラ削りを行っている。7は、口縁部のみの鉢である。端部は小さく外側に折り曲げ、体部は丸く屈曲している。以上の土師器は、飛鳥時代から奈良時代にかけてのものである。8~13は、大小の皿である。時期は、中世のものである。口縁端部は丸く終わるもの

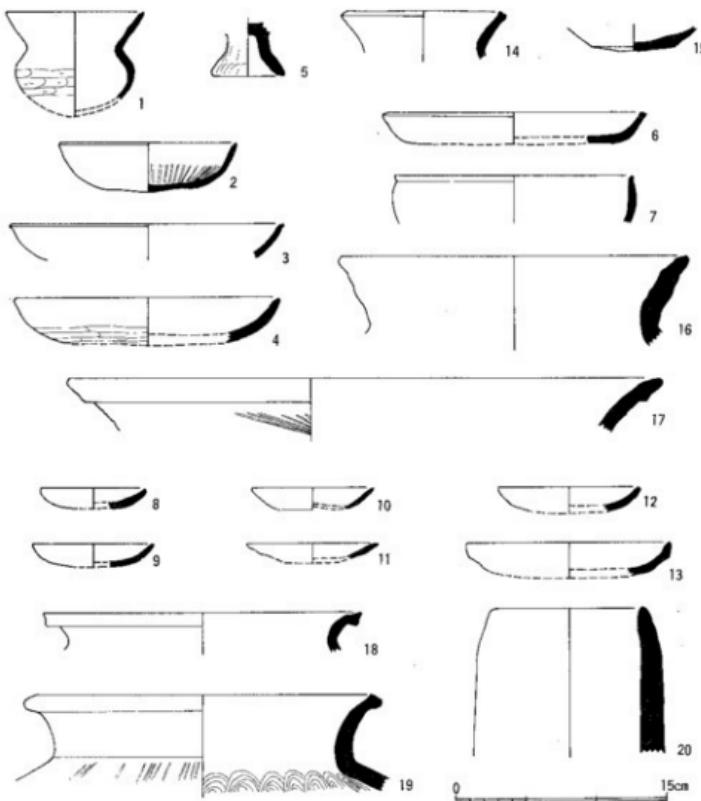


図-5 出土遺物（土師器・須恵器）

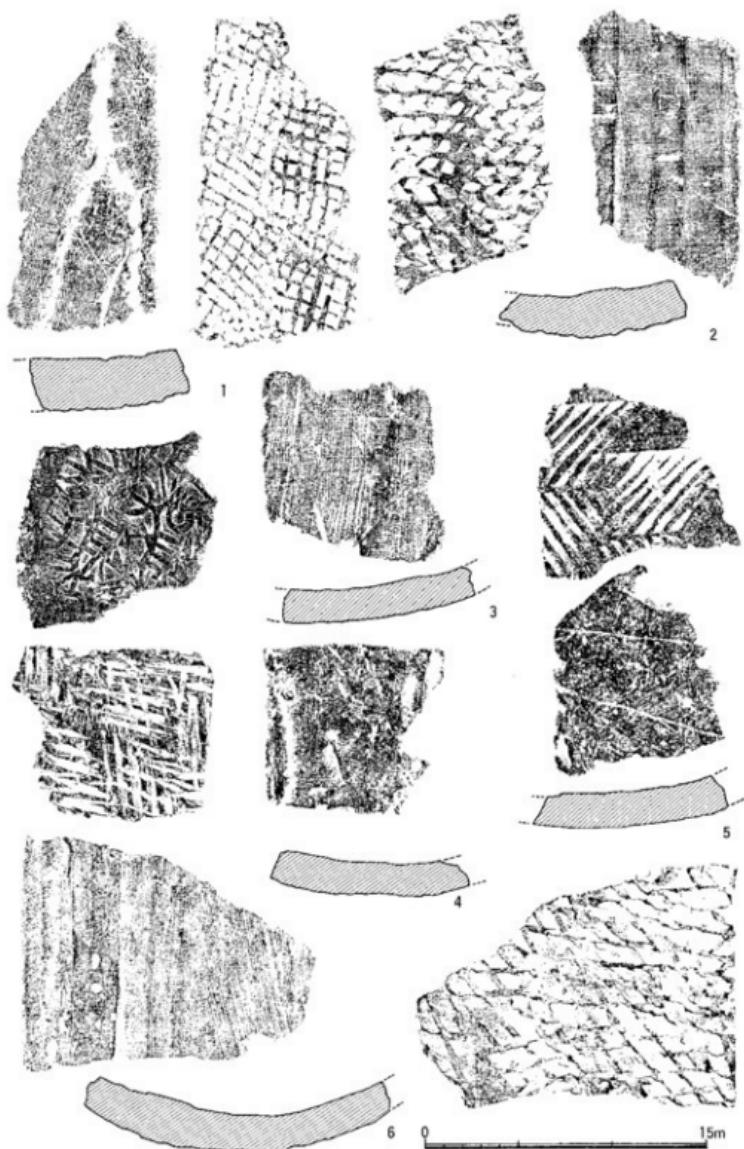


図-6 出土遺物（瓦）

のが多く瓦器のある時期の新しい様相がみられる。

須恵器（図-5）

須恵器は、杯、瓶等が出土した。15は、杯身の底部である。底部は、ヘラ切り未調整である。擬宝珠様つまみが付く直前の時期の飛鳥時代中頃であろう。14、16~19の瓶は、口縁端部が丸く終わるものが多いがなかには内外面に小さな凸線がある。17の外面上には、ヘラ描の直線文があり、19は、平行叩き痕がある。飛鳥時代から中世までの時期のものであろう。20は、瓦質の土管である。近世のものであろうか。長さ30~40cmの差し込み式の土管である。

瓦（図-6、7、1~10）

瓦は、コンテナ10箱分程度出土している。時期が智識寺関連の飛鳥時代前後のものと中世の頃のものがある。前者について主に説明を加えていきたい。

1は、凸面の全面に格子の叩きを施したものである。格子の原体は明確でないが横方向に叩いているようにみられ、格子は、5本/3.5cm、5本/3.3cmを測る。凹面は細かい布目痕があり、布端部の燃紐が合せた部分と分かれた部分の痕跡がある。分割さい線の跡ではないであろう。端部は、半ばまでヘラ切りをして残りを折り割っている。製作は、桶巻作りで、厚さは2.7cmである。色調は、茶灰色である。よく焼成を受けている。2は、凸面がやや大きめの格子叩きの平瓦である。製作は、桶巻作りで端部は1と同様である。凹面は、布目がよく残り模骨痕が顕著である。厚さは2.4cmを測る。色調、焼成は、青灰色、良好である。3は、凸面に綾杉の変形した模様を付けるものあまり類例がない。須恵質によく焼成されている。厚さは1.7cmを測る。4は、凸面に平行の叩きを縱及び横方向に施すもので、側面と底面は一刀に切断している。製作は、桶巻作りであるが厚さが1.6cmと薄いので1、2の側面の切断の違いが出たのである。これも須恵質によく焼成されたものである。5は、凸面に綾杉の叩きを横方向に施したものである。横幅は、約9cmである。焼成は、やや甘く凹面は布目痕が不明確である。厚さは、1.8cmである。6は、凸面が大きな格子の叩きを施したもので須恵質によく焼成されている。製作は、桶巻作りで、側面を中央部までヘラ切りして折断している。桶から取り出す際に模骨の凹凸があるのでヘラにより削り落としている。厚さは、約2cmを測る。7は、单弁8葉蓮華文軒丸瓦である。子葉は、大きく肉厚である。間弁は返りが強く高い。大きな中房の蓮子数は不明であるが大きく高い。外区は、無文で幅1.8cm、厚さ2.8cmを測る。焼成は、須恵質、胎土は、1mm以下の砂粒を多く含む。8は、凸面に繩目叩きを施す平瓦である。量的に最も多い。製作は、一枚作りである。切断面が凹面と鈍角に成すようにヘラ切りし、さらに面とりしている。端面はヘラ切りの後凹面の1cm幅をヘラ削りしている。厚さは1.9cmを測る。焼成は、良好で、色調は、灰青色である。9は、凸面に繩目叩きを施し、製作は一枚作りと

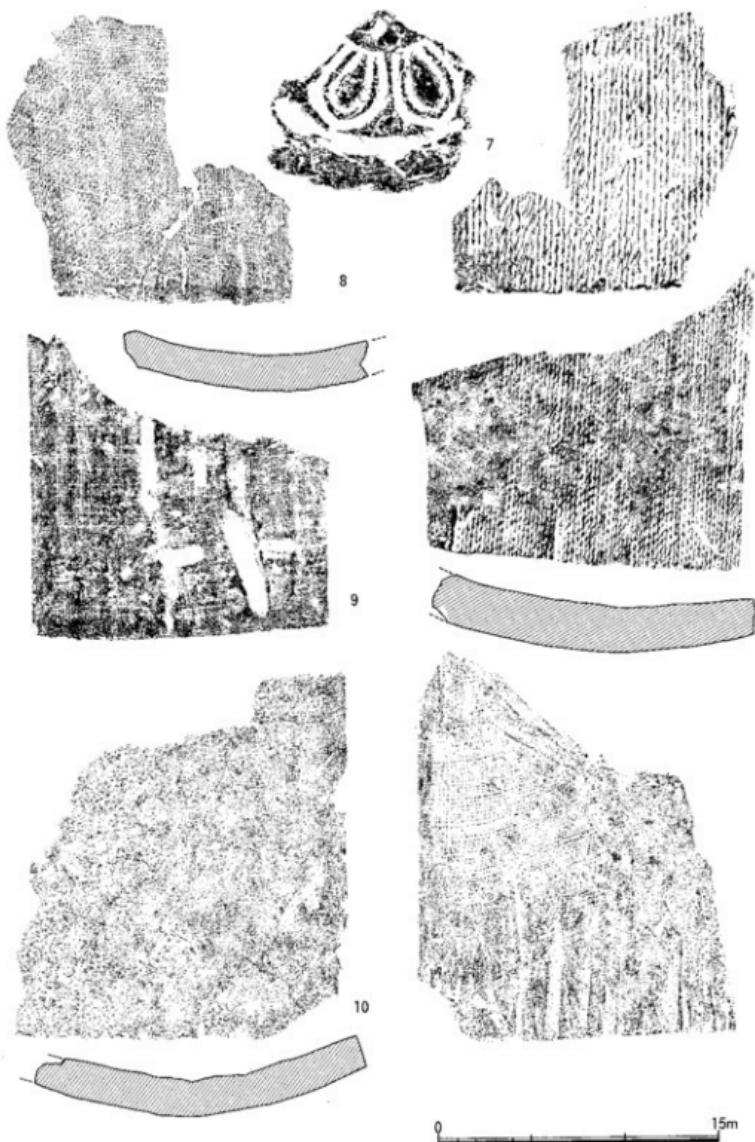


図-7 出土遺物（瓦）

考えられる。側面は、ヘラ切り後軽くもう一度削っている。凹面側端部と広端縁部を約1cm程削る。厚さは2.5cmを測る。焼成は、すこし甘くよく摩耗している。10は、時期が少し下るもので凸面はヘラなでにより叩きはみられない。表面がざら面である。凹面は、荒い布目痕が部分的に残りあとはヘラによってなでている。側面は、ヘラ切り後軽くもう一度削りしている。焼成は、よく須恵質である。

その他の遺物

特に注目する遺物に焼壁がある。金属質の溶着物が付くものがあり、鍛冶関係のものかもしれない。壁の中にはスサの入っているものも見られる。色調は、灰褐色、胎土は、多くの砂粒を含む。

まとめ

当調査区は、智識寺の寺域内の範囲にあり、その規模や寺院配置等がどれだけ明確になるか注目された。寺院関連の遺構は、検出されなかった。しかし、南北方向の溝が数条検出してその埋土に当寺院の瓦と考えられるものが多く出土して直ぐ隣接した場所であった事が証明された。瓦は、あまり碎片でなく流れ込んだものでもなく何らかの都合で廃棄されたのであろう。さらに、これらの瓦と供伴して焼壁が出土した。これは、当寺の盧舎那仏が塑像であったかの命題になんらかの回答を与えてくれるものかもしれない。周辺における調査では特に注意しておく必要があろう。当地域周辺の古代寺院の下層には多くの遺物が出土して寺院建立前に集落が存在していた事が分かっている事例が多いが当寺院の下層からは極端に遺物量が少ない。これは、今後の課題としておきたい。

文献

柏原市史 第四巻 史料編（I） 1975

柏原市教育委員会『大県・大県南遺跡』 1984

柏原市教育委員会『大県南遺跡』—山下寺跡寺域の調査— 1984

柏原市教育委員会『鳥坂寺』 1986

第3章 安堂遺跡

88-1次調査

- ・調査地区所在地 柏原市安堂町731-2
- ・調査担当者 北野 重
- ・調査期間 1988年6月13日～6月14日
- ・調査面積 24m²/873.3m²

調査概要

本調査は、分譲住宅に伴う事前の発掘調査である。當該地は、農地改良のため事前に土砂の掘削が行われていた現場を文化財パトロールにさいして発見し、事業主体者と連絡をとり工事の中止を申し入れた経緯がある。その後、農地の使用が認められず1年近く放置され、所有者の変更がなされた事例である。

調査は、現況が旧地形と大きく変形しているため、文化財の存在が認められる場所に3ヶ所のトレンチを設定した。各トレンチとも既に地山面まで削平されており、遺構の確認は出来なかった。

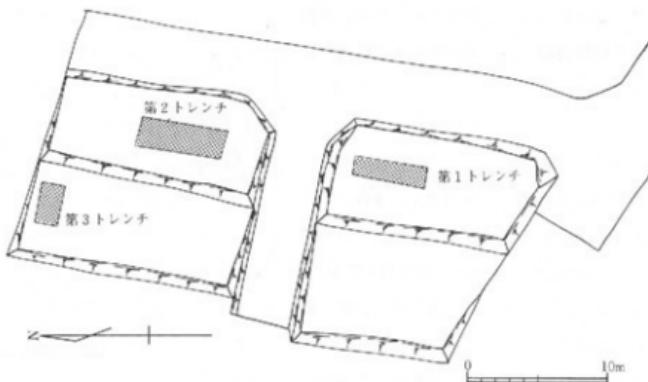


図-8 調査地位置図

88-3次調査

- ・調査地区所在地 柏原市太平寺1丁目130-1
- ・調査担当者 北野 重
- ・調査期間 1988年8月22日～8月31日
- ・調査面積 $70\text{m}^2 / 4,561.7\text{m}^2$

調査に至る経過

柏原市は、遺跡外であっても面積が多大の場合には文化財の確認のために、開発申請の事前協議に際して埋蔵文化財包蔵地存在確認試掘調査依頼書を提出してもらい、その依頼書に基づく試掘調査を実施している。本申請地は、この手続きを踏襲して、試掘調査の結果、遺構と遺物の存在が確認されたので調査を実施したものである。本調査に至るまでには、遺跡発見届書と文化財保護法第57条-2による埋蔵文化財発掘の届出の提出、調査費用の負担と調査方法の検討等多次にわたる協議を申請者と実施した。その結果、本概報に掲載するとおり多くの貴重な成果を上げることが出来た。これは、申請者からの文化財への理解と協力を戴いた賜物である。

昭和62年9月3日 埋蔵文化財包蔵地存在確認試掘調査依頼書の提出

昭和63年6月29日 試掘調査の実施

昭和63年7月15日 遺跡発見届けの提出

昭和63年8月1日 原因者負担事業発掘調査の費用負担契約締結

昭和63年8月22日 発掘調査の開始

昭和63年8月31日 同終了

調査は、鋼矢板の打ち込みを実施した後、遺物

包含層まで機械掘削し、その下層を人力により掘り下げた。

遺構

当調査区の基本土層は、第1層は、約1.3mの盛土である。第2層は、約20cmの旧表土である。第3層は、約60cmの厚さを測る灰白色砂土である。第4層は、灰色シルトである。第5層は、第3層と同じ灰白色砂土である。第6層は、約40cmの青灰色粘質土である。第7層は、約40cmの暗青灰色粘質土で遺物包含層である。

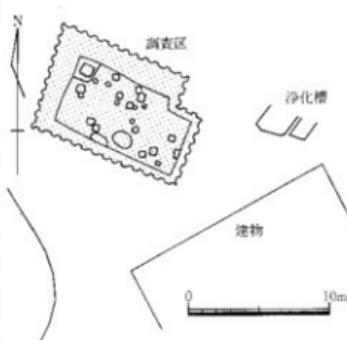


図-9 調査区位置図



図-10 遺構平面図

遺構は、第7層を掘削後に井戸1、土坑1、建物ピット多数等を検出した。順次説明を加えていきたい。

井戸-1

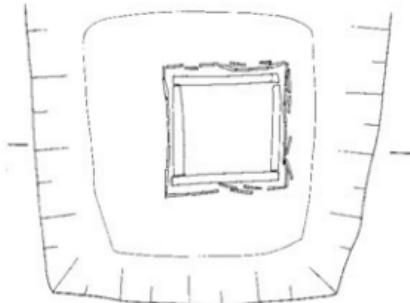
調査区の北東隅に検出した奈良時代の木枠の井戸である。規模は、一辺約85cmの方形で、堀方規模は、一辺約2.5mを測る。堀方埋土は、暗青灰褐色粘質土である。地山の緑灰色粘質土の混入も多くみられた。また、土師器や須恵器の土器が入り込んでおり井戸の掘削時期がある程度限定出来そうである。ほぼ磁北を向いている。

井戸の内側の上層埋土は、青灰色粘質土である。遺物は、ほとんど含まない。検出面より約40cm掘り下げた段階で四方向に立ち並べた板材を検出した。板材の横幅は、9~17cmあり、側面をくっつけているが間隙の存在する部分がある。堀方の方からその間隙を補強するように少し短い板材を当てている。そこからさらに40cm下から横方向の補強材が各方面に3本づつ添えられている。この部分から下方の埋土は暗青灰色粘質土で多くの遺物が含まれていた。深さは、底部まで約2mを測り、底部近くで土師器、須恵器、曲物、製塙土器等が一括して出土した。一番底は、端部を斜めに切り落とした板材を四方に組んでいる。堀方底部はほぼ平坦で井戸枠と平行して方形を成している。一辺1.5~1.7mを測る。板材の大きさは、四方に立て掛けた板材が長さ111~164cm、横幅9~99cm、厚さ1.5cm、上方の横板材が長さ76~99cm、横幅1~7cm、厚さ1.5cm、裏当板材が長さ45~50cm、横幅1.5~7cm、厚さ1.5cm、底部の板材は長さ70~78cm、幅2~5.6cm、厚さ4~5cmを測

る。

土坑-1

調査区の中央部西側に検出した隅丸方形の土坑である。規模は、一辺105~125cm、深さ約50cmを測る。堀方断面は、円弧状を呈している。埋土は、薄茶灰褐色粘質土で上層は青灰色氣味である。遺物は、土師器、須恵器があり、中層及び底部近くから出土した。遺物の出土状況は、中央部に向けて傾いており、徐々に埋没していった様子である。堀方一辺の方向は、磁北に対して約30°西に傾いている。



建物-1

井戸の南側に多くのピットを検出した。これらのピットは、方形の堀方内に柱穴を持つものが多く建物を構成するものと考えられる。建物の形態や規模等

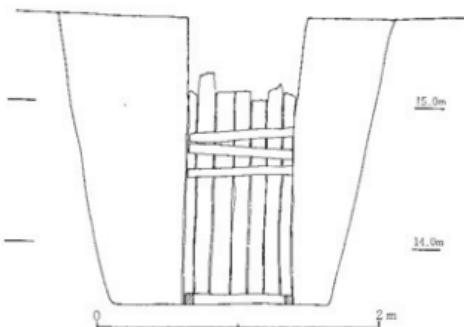


図-11 井戸-1

は、調査面積の関係もあり明確ではない。建物-1は、ピット1~4からなり、N-23°-Wの傾きを持つ東西1間(2.8m)以上、南北1間(1.3m)以上の建物である。近くに同様のピットがあり、建替が行われたとみられる。ピットの大きさは、一辺50~60cmを測り柱穴は20~30cmである。時期は、ピット内からの遺物が少なく明確でない。井戸-1の方が後出的であろう。

建物-2

南側に検出した東西1間(1.8m)以上の建物である。建物方向は、N-50°-Wである。ピットの大きさは、50~65cm、柱穴25cmを測る。しかし、堀方一辺の方向がピット1とピット2が少し違うのが認められる。

その他のピット

円形のピットを多く検出したが性格は明確でない。時期は、建物とはほぼ同時期である。

遺物

当調査区内から出土した遺物は、遺物包含層及び遺構から土師器、須恵器、製塙土器、木器等が出土した。それぞれ説明を加えたい。

井戸-1出土遺物（図-12、1~17）

井戸の埋土から土師器の杯、皿、鉢、瓶、須恵器の杯蓋身、硯、鉢が出土した。1は、口径8cm、器高2.2cm小型の杯である。口縁端部は、上向きの平坦面を持ち、色調と胎土は、茶灰色、精良である。外面をなで、内面を板などで調整を施す。2は、内面に放射状の暗文がある皿である。3、4は、体部外面に墨書きが描かれているものである。小さい破片のため次に説明する人面土器と同様なのか不明である。6は、口径27.8cmを測る鉢である。端部は、内側に小さく折り曲げて丸く終わらせる。内外面板などでによる調整である。7は、口縁端部を外側に大きく折り曲げた鉢である。外面を指などでとなで調整して、内面を板などで調整している。

8は、人面土器である。口径16.5cm、器高14.6cm。口縁部は立ち上がり端部は上面が平坦になるように小さく折り曲げている。体部径は、口縁部径より少し大きめであり張りを持たない丸くなっている。胎土は、石英、長石、金雲母の砂粒を少し含んでいる。色調は、茶灰色である。仕上げは、外面は、口縁から肩部にかけて横方向の板などで施し、下方は、荒いなで調整を施す。成形時の粘土紐の継目痕跡が顕著に残る。内面は、板などでによって平滑に仕上げている。底部に7cm径の円板を作り粘土紐をラセン状に巻き上げている。人面の描いた所は、2ヶ所に認められるが、両者とも先が尖ったもので描いた部分だけを擦り落としている。一面（図示）は、額、口、口縁、鼻の一部があり、薄く残っている。他面は90°回った場所にあり、描き損なったものか。線の太さは、1~1.5mmのやや細い線である。口縁部の一部が少し欠ける程度ではほぼ完形である。9は、人面の描かれた部分だけが残った（全体の1/8）瓶の破片である。口径17.7cm、器高14.2cmを測る。色調と胎土は、8と同様である。仕上げは、8と同様であるが、体部中央部に数本のヘラによるなで跡がある。額の部分が中央に凝集しているが、全体に太い線で安定的に描かれ、線の描く始まりが尖らなく太い特徴を持っている。目は、穂やかな仏像のように落ち着きを持ち口も小さく微笑んでいる。線の太さは、1.5~4.0mmを測る。10は、口径16.8cm、器高14.0cmの瓶である。色調、胎土、仕上げは、8と同様である。人面の表情は、眉を寄せ、目を細くして一点を凝集した額付きで、人物の左方に目と口がつり上がり執念深く怒っているように見える。残存は口縁部が少し欠ける程度ではほぼ完形である。線の端部は、細く尖っている。線の太さは、1.2~4.0mmである。

11は、杯蓋である。口径10.3cmを測り、擬宝珠様つまみが付く形態のものである。天井部

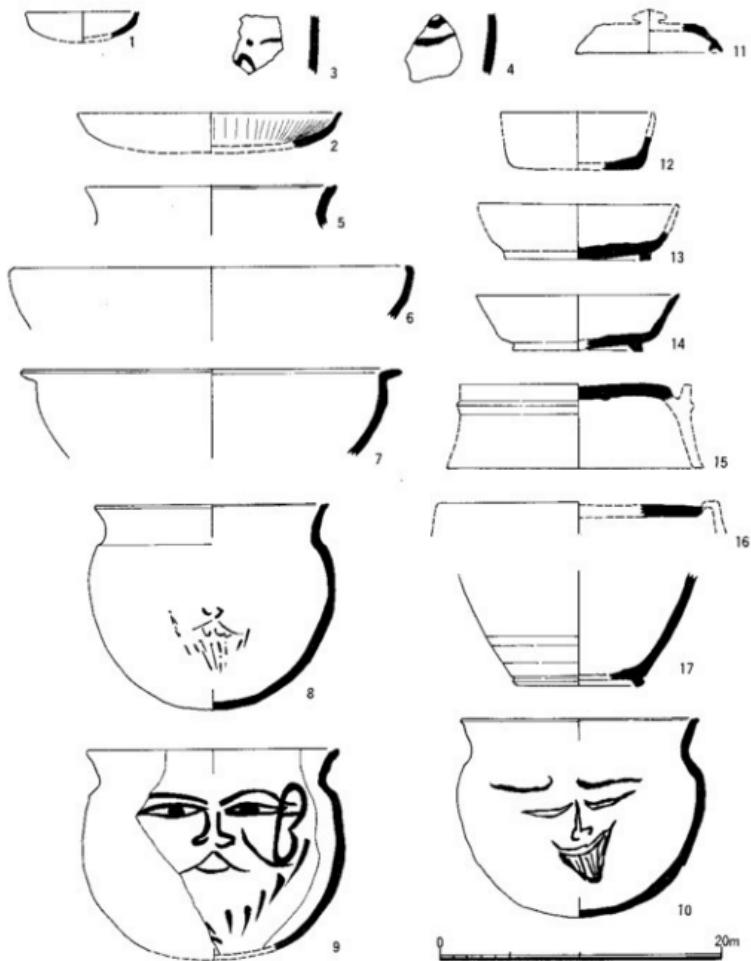


図-12 井戸-1 出上遺物

に回転ヘラ削りがある。12は、高台の付かない平底の杯である。13、14は、小さな高台が付くものである。15は、円面の陶硯である。丘部のみ遺存している。使用された痕跡や傷も若干見られるが、長期間の使用ではなかったように思われる。丘の径は13cmである。16は、同じく陶硯で丘部のみの遺存である。15のものより使用されており、上面がよく擦り減っている。17は、高台のある鉢である。体部外面の下方は回転ヘラ削りを施し、その上

方は回転なで調整である。胎上は精良である。

井戸-1 堀方出土遺物（図-13）

遺物は、土師器の杯と瓶、須恵器の杯と壺がある。1は、半円形の杯である。口縁端部

は外上方へ折り曲げ細く終わ

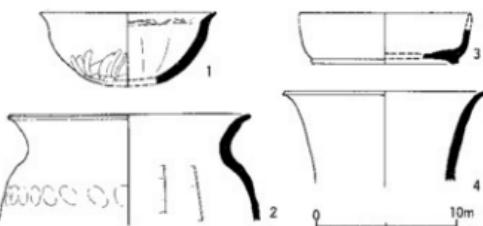


図-13 井戸-1 堀方出土遺物

らせてている。体部内面は、板なでによる。外面底部はヘラ削りを行う。時期が6世紀まで遡る古いもので後世の攪乱によって混入したものであろう。2は、口径16.9cmの瓶である。口縁部は、外上方に折り曲げ端部を丸く終わらせている。内面は、板なで調整で、外面は、指押さえがみられる。3は、杯の破片で高台が付くものである。4は、長頸壺で口縁端部が大きく外反するものである。これらの遺物から井戸の掘削した時期は、7世紀の後半頃であろう。

土坑-1 出土遺物（図-14）

遺物は、土師器の杯、皿、須恵器の杯蓋身が出土した。1～3は、内面に放射状の暗文を持ち、端部が丸く尖り気味のもの（1）、内傾する段を有するもの（2）、内側に内湾するもの（3）がある。1には外面にヘラ磨きがある。2の内底面にラセン暗文がある。4は、暗文がみられない。5、6は、内面に2段の暗文を有する。

7は、口径13.2cm、器高4.4cmのやや深い杯である。外面上方にヘラ磨きがあり底部はヘラ削りである。8は、皿で内面に放射状の暗文がある。

9は、口径8.3cmを測り、擬宝珠様のつまみが付く。10～12は、口縁端部は丸く高台が

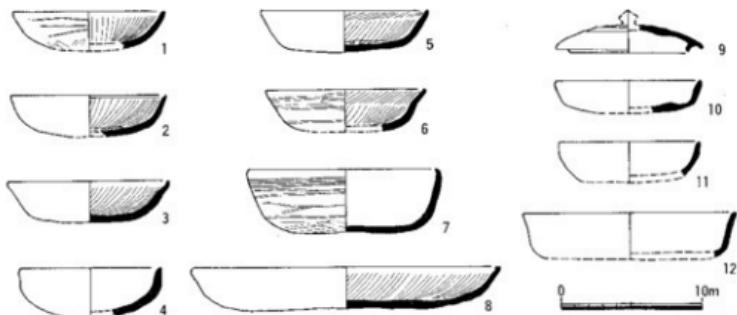


図-14 土坑-1 出土遺物

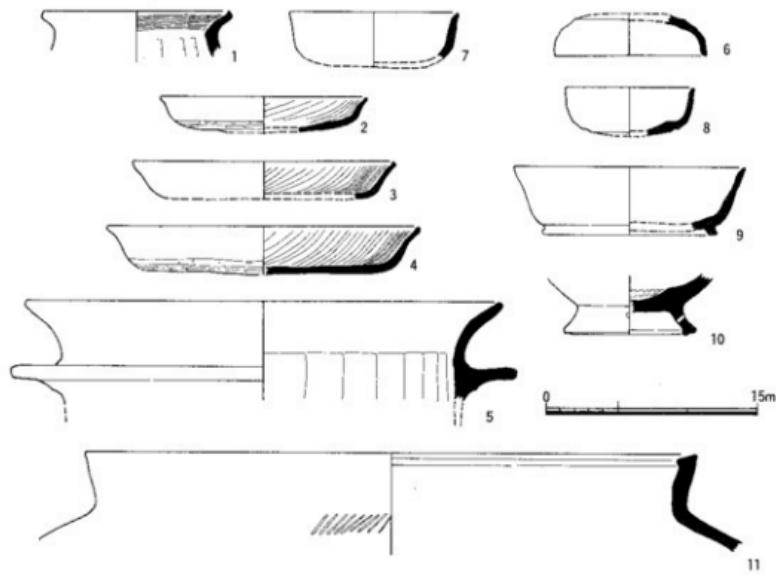


図-15 包含層出土遺物

付かない形態のものである。時期は、7世紀中頃のものであろう。

包含層出土遺物（図-15）

遺物は、土師器の瓶、杯、羽釜、須恵器の杯蓋身、壺、瓶がある。1は、口縁部が外反し端部が上方に小さく折り曲げたもので、口縁の内面にハケ目が遺存する。胎土は、石英や長石の砂粒を多く含む。色調は、薄茶灰色で当地域産のものである。2は、口径14.5cmの杯で、内面に放射状の暗文があり、底部にヘラ削りがみられる。3は、口縁端部が内側に小さく曲げた杯である。4は、2、3の杯よりさらに口径が大きくなったもので内面に放射状の暗文があり底部にヘラ削りがみられる。5は、口径33.5cmの羽釜である。口縁部は、外反しながらたちあがり、鉢部は、水平に伸び丸く終わる。胎土は、石英、長石、金雲母、角閃石等の砂粒を少し含む当地域産のものである。体部内面は、指押さ後削ったような板なのである。

須恵器の蓋杯6は、口径10.7cmの小型のもので天井部は回転ヘラ削りをおこなっている。7、8は、身に属するもので口縁端部は内傾して尖り気味に終わる。9は、口径16.4cmを測り高台を付ける。井戸-1より出土した杯（図-12、14）とよく似たものであるが、口縁端部が丸くなり焼成が少し甘いので新しい様相がある。10は、壺か鉢の底部である。高台は、外側へよく張り端部は角を丸くした方形である。方形透かし穴がみられるが何方に

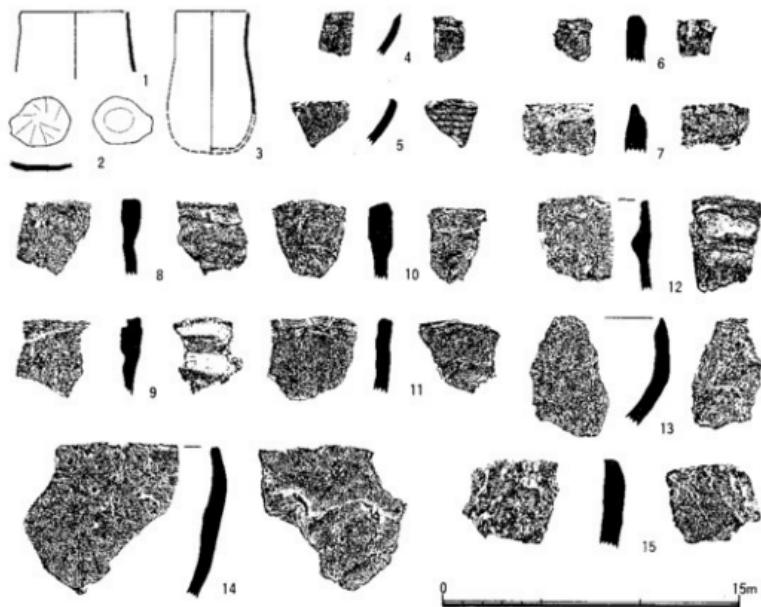


図-16 製塙土器

あるか不明である。内底部は、ヘラ先により粘土を削りとった痕跡がある。11は、口縁が上方へ短く伸びたもので端部が内側へ肥厚している。外面は、平行叩きを施した後なで消している。

製塙土器

遺構内及び遺物包含層から計17点出土した。遺構内からは、ピット（1、4、5）、井戸ー1（6～11、15）が出土した。1～3は、コップ型をした薄い器壁のいわゆる小梨丸底のものである。胎上は、精良、色調は、灰茶色である。2の内底部には板状の内部を成形した時の痕跡がみられる。時期は、今回検出した遺構の以前と考えられ、6世紀代のものであろう。4、5は、杯型のもので内面に貝殻様の横方向の条痕がある。色調、胎土は、1～3と同様である。他のものは、ほとんど器形がわからないが、砲弾型または杯型の少し大型の土器であろう。口縁端部にそれぞれの特徴がある。端部が肥厚するもの（8～10）、体部からそのまま終わるもの（6、11、14、15）、先が尖り気味に終わるもの（7、13）、内面や下方で肥厚するもの（12）がある。色調は、灰褐色から茶褐色まであり、良く焼成したものは、桃灰色である。外面の調整は、6は、僅かに叩きの痕跡がみられるだけで

他のものは荒いなでを施している。内面は、横方向の板なで又はなで調整である。15のみ布目（18本／cm）跡がある。井戸内遺物から時期は7世紀後半が考えられ、遺物包含層のものもそれ以降から8世紀前半までが考えられる。

まとめ

今回の調査によって得られた所見を若干述べてみたい。まず最初に、当地域の調査状況は、近年、周辺部の開発が顕著で遺跡の深度まで深く掘削する工事が多くなり各時期の遺構と遺物が検出されるようになった。縄文時代の早期の押型文土器から弥生時代、古墳時代、飛鳥時代へと継続した複合遺跡であることがわかつてきた。とりわけ飛鳥時代は、東大寺の大仏が発願された契機となったことで著名である智識寺の直ぐ南側にあたり、その関連で智識寺南行宮の所在が調査の進展とともに検討されるようになってきたのである。遺構は、大きな堀方を持つ建物跡が整然としてあり、遺物は、調査税を示す木簡や多くの墨書き土器の出土がある。この他にも河内大橋の比定地の一つとして考えられている。調査ではこれらに関するものがないが、大和川の旧堤防に近くこれまで氾濫源と考えられていた場所で集落跡を検出したのは、舌状に伸びる台地が存在してその先端に大橋が架けられていたことも考えられる。

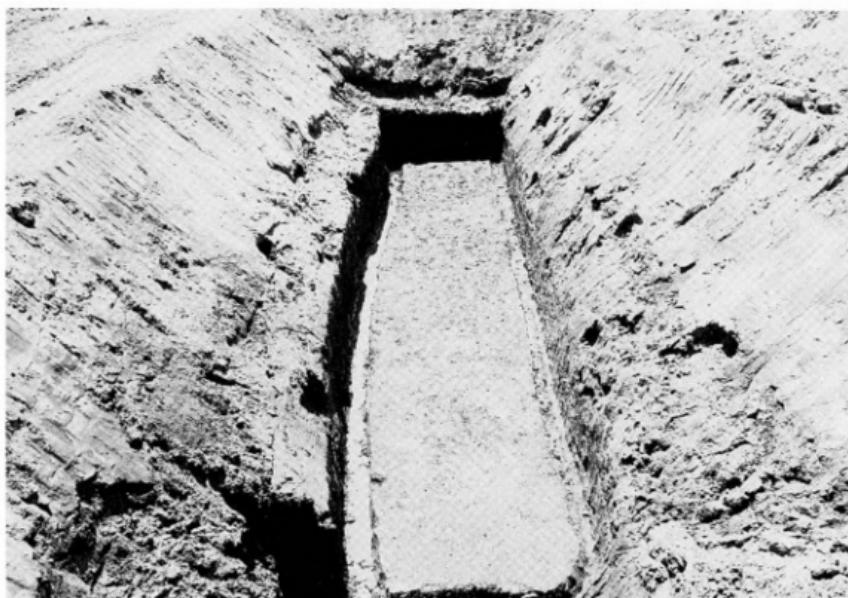
井戸-1から人面土器が3点出土した。曲げ物と一緒に廃棄されていたものであるが、人面が描かれた部分だけが有る土器、一度書いて途中で2度とも消している完形の土器、ほぼ完形の人面土器である。それぞれどのような意図があって三様の形を取ったのか興味あるところである。また、井戸や川等に廃棄されるこれらの人面土器のもつ祭祀的性格は当時の人々の精神生活の一端が垣間見られる。

文献

柏原市教育委員会『安堂遺跡』 1987

柏原市教育委員会『柏原市遺跡群発掘調査概報II』 1988

図 版



第3トレンチ上層



第3トレンチ上層

図版二 第三トレンチ上層・断面



第3 トレンチ上層



第3 トレンチ断面



第3トレンチ下層



溝-1

圖版四 遺物出土狀況

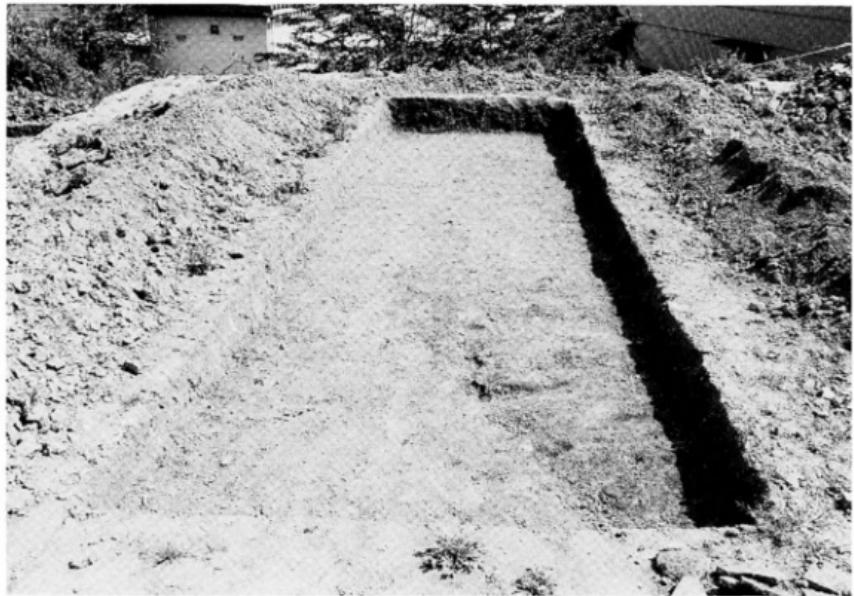


遺物出土狀況

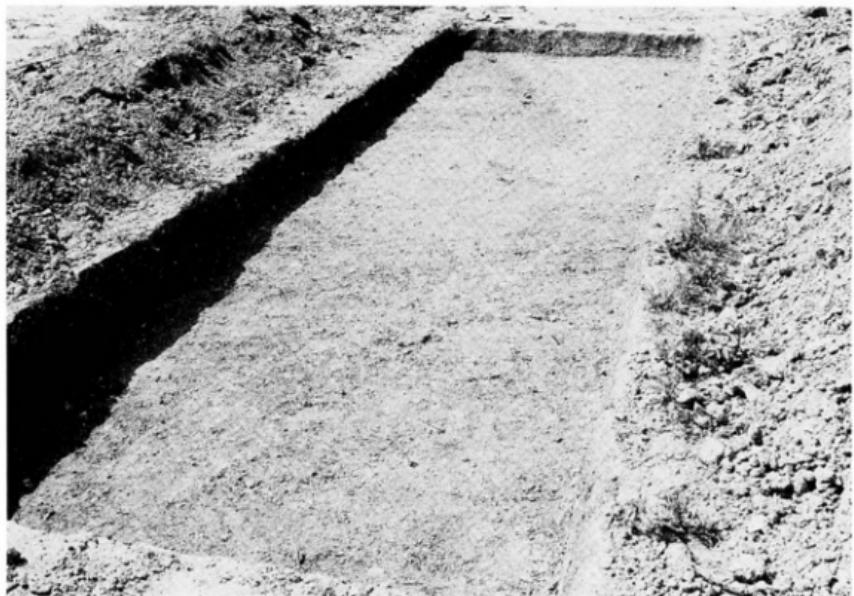


遺物出土狀況

図版五 第一トレンチ



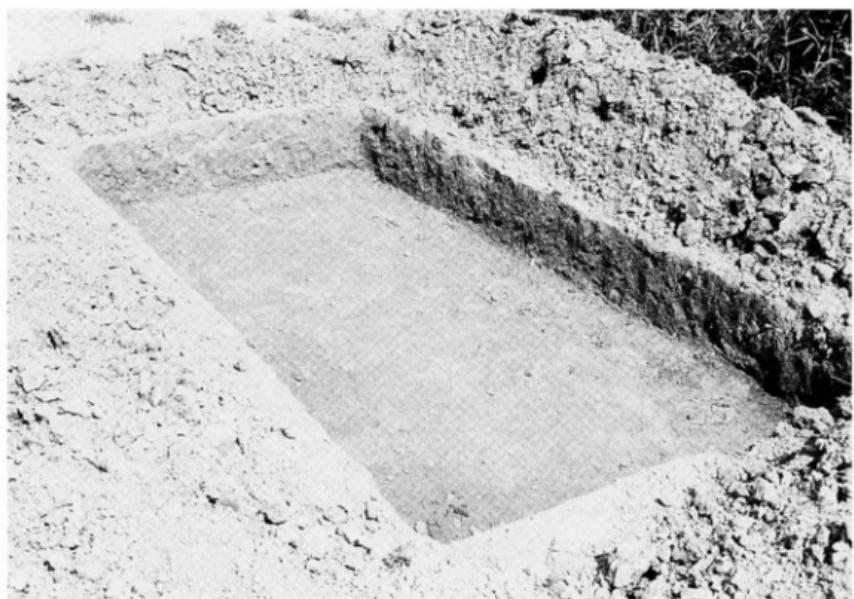
第1トレンチ



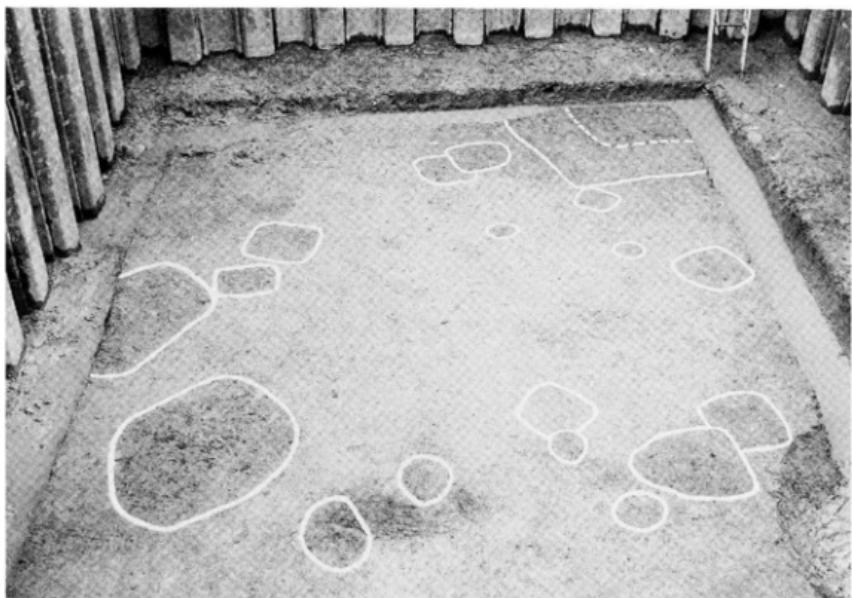
第1トレンチ



第2トレンチ



第2トレンチ



遺構検出状況



井戸一



遺構全景



遺構全景



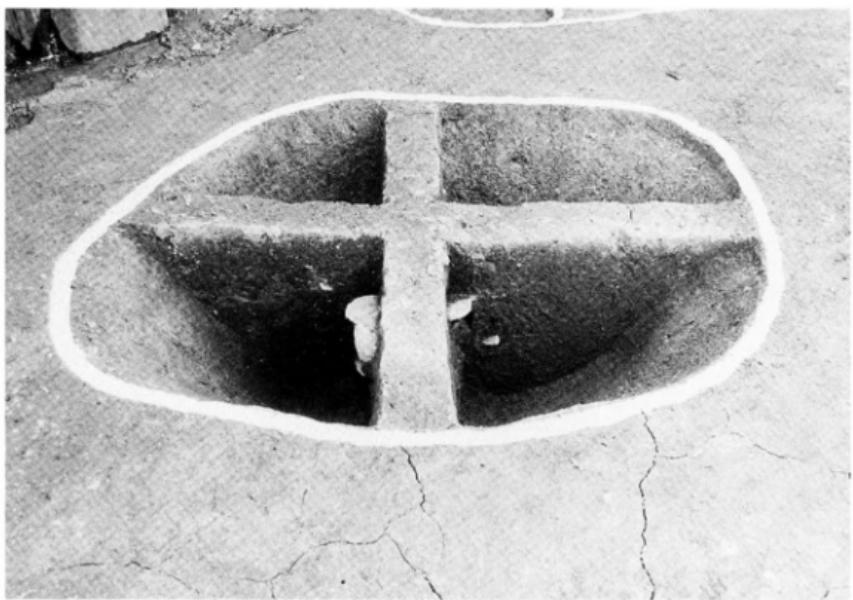
井戸一



井戸一



建物-1



土坑1



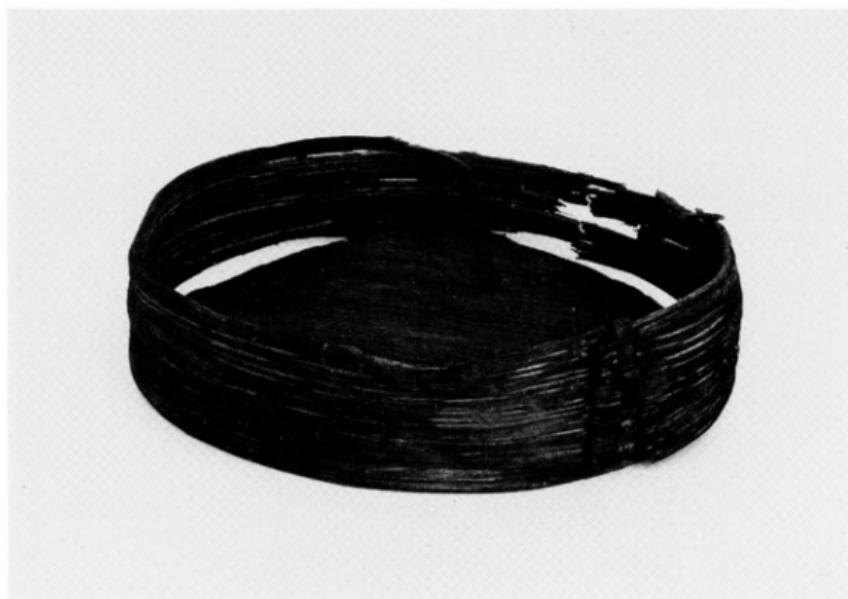
出土遺物



出土遺物



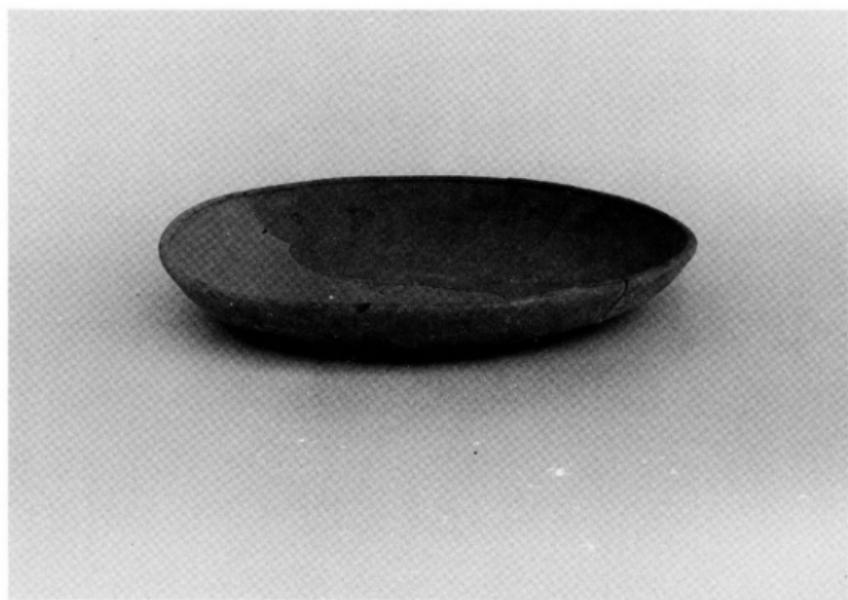
出土遺物



出土遺物

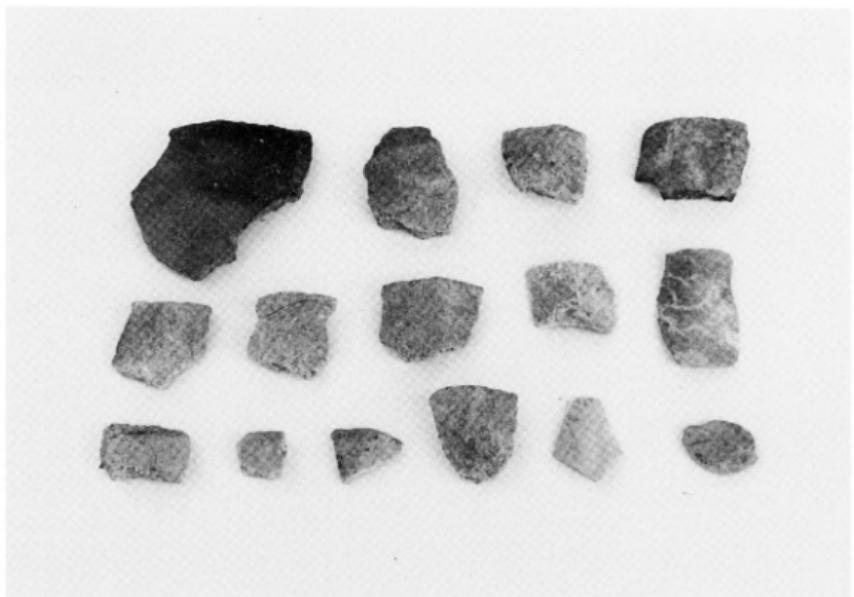


出土遺物



出土遺物

図版十四 製塙土器



製塙土器



製塙土器

柏原市所在遺跡発掘調査概報

1988年度

編集・発行 柏原市教育委員会

発行年月日 平成元年3月31日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

